

## 日本英語教育史学会 会報

288

2018 年 8 月 23 日

**HiSELT** Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562  
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室  
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191  
e-mail: membership@hiset.jp会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)  
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873  
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873学会公式ウェブサイト [www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)

## 第268回研究例会報告

2018 (平成 30) 年 7 月 21 日 (土), 専修大学サテライトキャンパス (川崎市多摩区) において第 268 回研究例会が開催されました。参加者は 26 名でした。

例会では 2 本の研究発表が行われました。はじめに, 下絵津子氏 (近畿大学) が「第一高等学校入学試業の外国語科目: 1880 年代から 1910 年代の変遷」というタイトルでお話しされました。続いて川嶋正士氏 (日本大学) による「『英語青年』から読み取る細江逸記の規範的文法観: 「5 文型」断章 2018」の発表が行われました。司会は河村和也氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は下氏, ②は川嶋氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①明治期の外国語教育における英語以外の外国語科目の変遷が具体的にわかり, 有益でした。今後は, そうした科目の変化をもたらした原因を考察していただければと思います。また, 法令上の規定が実情を反映するとは限りませんので, 各外国語の実際の履修割合などを可能な限り明らかにする必要があります。前者に関しては, たとえば 1880 年代のドイツ学振興策には政治的な意図があったようです。政府は高まる自由民権運動への対抗措置として, 英国流の立憲議会政治やフランス流の民主共和制の影響を弱め, 代わりにドイツ (プロイセン) 流の国権主義的な君主制思想を強めることで, 天皇制を強化しようとした。そうした背景をぜひ考察いただけると, より本質に迫れると思います。 (みかん舟)

◆①ある授業で, 戦争の影響によって日本を植民地化, あるいは支配した国が違っていたら, 私たちが学ぶ外国語や世界共通語が英語ではなかったかもしれないという話を聞いたこと

がありますが, 本日の発表にもありましたように, 私たちが今日学んでいる言語が戦争や政治の影響を受けているということを改めて感じました。

私が中学生, 高校生の時に授業で学んだ外国語が英語であり, 入試でも外国語は英語であったため, 入試で他の言語を選択したり受験したりすることを考えたことがなく, また, 外国語の授業で英語以外の言語を学ぶことを考えたこともなかったため, ドイツ語やフランス語学の振興が見られた当時に, なぜ必要とされていたのか, 詳しく知りたいと思いました。

(岩崎七夏)

◆①ただただ英語を勉強しているだけなので, 英語教育の歴史に関して考える機会がなかったので, 新鮮だった。今の日本の教育からは, かつてはドイツ語やフランス語が振興されていたというのは興味深かった。更にそのことについては発表後の質疑応答でのやりとりも, なるほどと思え楽しかった。 (匿名希望)

◆①一高の入試についてのお話と聞いていたので、内容についての話かと思っていたら、独語や仏語を入試に入れるか否かというお話だったので少々意表を突かれましたが、大変面白い話でした。

現在でも、武蔵や白百合が独語や仏語を高校や中学で教えていたりするのと通じる話でしたし、去年からは東大が入試で英語の成績が良かった学生を集めて、第 2 外国語を特別に訓練する制度を始めていたりするのも同じ様な方向性であると感じました。(渡邊剛志)

◆①独語を勉強してきた者なので、ドイツ語の振興についての時代背景がとても面白かった。外国語教育と国際が密接に関わっていること、注意して自分で選びとる意識づけをしておかないと、少しこわいと思った。(風間)

◆①英語の歴史について、どのような経緯で教育に取り込まれたのか、ということを知ることができた。また、英語だけでなく、フランス語、ドイツ語も重要言語としての扱いを受けていたことを初めて知った。(金井美樹)

◆①明治期の歴史についてまだまだ勉強不足だと思いました。この時期の日本人の識字率が高いことは知っていましたが、ここまで英語や仏語、独語が入試に関係していたことに驚きました。日本人の日本語の識字率の高さが他言語を学ぶことに大きく貢献していたと思いました。そこで少し気になったのが、英語や独語、仏語の定着率、どれくらい英語や他言語を使用できていたのか気になりました。今の時代、英語ひとつを学ぶのにも必死なのに、2つ3つと言語を学んでいた時代の環境をより知りたかったです。(齊藤航介)

◆①当時の入試科目の英語のレベル(難易度)がどのくらいだったのか(どの程度の水準の語学力が求められていたのか)も興味があるので、プレゼンの資料として当時の入試問題の例など紹介して頂けたらより面白いかと思います。(英文法大好き)

◆①第一高等学校の入試の変遷とその背景がわかり興味深かったです。(持田哲郎)

◆①Background の部分で何個か質問を受けておりましたが、それらの点を補強した発表をききたいと思いました。テーマが興味深いので、より濃いものにしていってください。

(内田佳祐)

◆①入試における外国語の一本化において明治初期から議論が行われているとは思わなかった。現在のセンター試験でも外国語選択が可能の中一本化するのには中々難しい。

日本の憲法が独のビスマルク憲法を見本にしたのは知っていたが、近代化まで見本にしているとは思わなかった。明治における近代化は英国の影響が大きいと思っていた。(菅原玲耶)

◆①普段英語教育の歴史については学んでいましたが、また別の言語の入試科目の変遷とその背景にある教授科目の変遷に関して知ることができ、大変参考になりました。

教授科目一つをとってみても、その背景にはその国の歴史的な事情があったりと、とても学ぶことが多いなと感じました。本日はありがとうございました。(森貴博)

◆①中学の時から英語はあたりまえのように学んできたが、1880年代から学習言語を独、仏、英のどれにするか話し合われていたことを初めて知った。またその変遷の背景も知ることができ、より英語学習へのモチベーションにつながると思った。(匿名希望)

◆①英語の歴史について、ここまで細かいものをお聞きしたのは初めてでした。英語以外の外国語(特にドイツ語)についての先生方からの質問が、それぞれ鋭いもので圧倒されました。

(匿名希望)

◆①第一高等学校入学に必要とされる外国語科目として英語は常に残される方向があったこと、ドイツ語やフランス語も時代(歴史)の背景の影響などもあって取り入れられるという側面があることがわかりました。(匿名希望)

◆①「第一高等学校入試における外国語」をテーマに、英語をはじめとした外国語がどのような変遷を辿ったのかを知ることが出来ました。発表の中では、フランス語、ドイツ語も取り上げられており、その重要性は昔から言われていたものであったと再認識した。特にドイツ語は医学において、必要であったことがその重要性を増させる一因となっていたと感じた。また、この発表を通して、なぜか？という問題意識を持つことが大切だと感じた。(鈴木裕太)

◆②『英語青年』に掲載された細江逸記関係の記事をあまねく調査され、それをもとにご自身で膨大なデータベースを作成された研究者魂には、ただただ頭が下がります。これらを基に、英語学の視点というよりも、いかに「英語教育=教授と学習」の視点で5文型成立・受容史を描けるかが、いよいよ問われる段階に入りました。大いに期待しております。

(みかん舟)

◆②5文型とは単なるルールとしか思っていなかったが、新たな視点で見ることが出来た。このような5文型のルールは現在の英語教育にどのようなメリットとなりうるのか、考えてみたいと思った。(鈴木裕太)

◆②文法の難しい話と思って聴いていたが、文法解釈の方法に隠された、無意識(形にはまったもの以外は認めない)も、気をつけていないと、自分の意識形成が変な方向に導かれるかもしれないと思った。文法は面白い。(風間)

◆②ただの英語のルールだと思っていた5文型に、深い歴史・考え方があることを知ることができた。初めにSVOOはどんな理由で第4番目にあるのか、という疑問はまったく予想することができなかった。

今回の学会を通し、多くの文献を読むことが大切であることがわかった。(金井美樹)

◆②学校に対する5文型の指導法でもっと理論をしっかりと定義付けすることができたら高校生にとっても入りやすいと思いました。一方

で英国などでは5文型の指導をあまり扱っていないとおっしゃっていました。日本では英語文法を学習する際まず5文型をしっかりと定着させていると思います。なぜこのような差が生じるのかが最もきになりました。(菅原玲耶)

◆②How are you?という一見簡単な疑問文でもここまで細かい研究があることに驚きました。私自身がまだまだ勉強不足で、目の前の学校文法が全てと感じていた視野が広がったことは大きな収穫だったと思います。本日は2つの発表をお聴きすることができ本当にいい刺激になりました。次は質問ができるくらい勉強してきます。(齊藤航介)

◆②中学3年生の時に初めて5文型を習い、教科書の英文をノートに写して文型をとることをよく行っていたのですが、How are you?の副詞と形容詞のお話を受けてそこまで細かい点まで注目したことがなかったため、とても驚かされましたし、細かい点まで気にかけて5文型をとってみたいと感じました。(岩崎七夏)

◆②五文型に様々な批判がありつつ、ではなぜ今日本でいまだに五文型が根強く教えられているのか、の考察もあれば興味深いと思いました。(英文法大好き)

◆②細江の研究について知ることができたことと、5文型のあり方についてのご考察について改めてお話していただき、勉強になりました。(持田哲郎)

◆②普段学校教育現場で教えられている5文型に関して、歴史的な背景と共に発表頂き、これだけ身近な事象にもこれだけ多くの未知の事実や、これまで見落としていた事実があり、それに気付くことができたのは大変貴重な経験となりました。本日はありがとうございました。(森貴博)

◆②細江逸記の顔のみてみたくなりました。歴史に対して興味がわきました。5文型に対する考え方を改め、教育にたずさわりたいので、さらなる研究を期待しております。(内田佳祐)

◆②英語青年から他資料まで研究されている量が想像以上だった。(匿名希望)

◆②五文型について、難しかったのですが、興味深いトピックでした。これまで自分が意識してこなかったものに焦点を当てていて、これが研究なのだと感じることができました。ありがとうございました。(匿名希望)

◆②5文型が個人的には日本でしか扱われていないということから自分の学習の中では重要視していなかったのですが、その中で5文型について研究している方の話をきけ、楽しかった。研究者とはどのような人であるかというのが体感できた感じがした。(匿名希望)

◆②5文型が今も何かしらの形で残っている背景には何か良いところがあるのではという見方が気になりました。(匿名希望)

◆②たまたま今日の午前中高校2年の夏期講習で5文型を教えてきたばかりなので、大変興味深く拝聴いたしました。高校の英語教師としては現在出版されている文法参考書に触れることしかないのですが、『英語青年』などの、その時代を反映したドキュメントには大いに興味をそそられました。大修館の『英語教育』は読んでおりましたが、『英語青年』は読んだことがありませんでした。(渡邊剛志)

◆②五文型の歴史を詳細に検証され、今回は特に『英語青年』を丹念に読み込まれ、細江逸記の業績を明らかにしたご研究には、ひたすら感服致しました。今後一層のご研究の進展を祈念しております。

さて、ご発表の内容に関しまして、特に本題の細江のお話ではなく、ご自身が「枕」とおっしゃっていた先行研究のご説明の中で、様々思うことがありましたので、ここでコメントを2つ、質問を1つさせていただきます。

まず、学校文法における五文型については、その不備があることは池上嘉彦先生をはじめとして、多くの研究者が指摘するところであり

ますが、実際、学校現場や予備校で五文型を「きちんと」教えている教員は、私を含めて五文型が完全なものだとは初めから考えていないのではないのでしょうか。

つまり、英文を読むにあたって、初級者にとって単なるアルファベットの連続でしかない英文を、意味のあるまとまりに分節させるための方便であると思っているのではないのでしょうか。その意味では神保格が細江の著書に対する書評で指摘したことは正しいと思いました。

コメントの2つ目ですが、本家では五文型はすぐに使われなくなったのに、日本でだけ今だに使っているといった趣旨のお話があったように記憶しておりますが、これには詳細な調査が必要ではないのでしょうか。

2017年2月に学生の引率で韓国に滞在した際、韓国のテレビ放送で日本の「高校英語」のような番組を放送していたので、韓国語は理解できないながらも、授業を視聴しておりましたところ、SVOCの説明をしている授業があり、驚いた次第です。しかも複数の番組でSVOCを使った解説をしておりました(iPhoneで動画を撮りましたので、ご興味があればお見せ致します)。

英文の意味を理解しようとする場合、母語として分析・理解する場合と外国語として分析・理解する場合とでは、その方法論が異なっても不思議はないように思います。日本で国文法が国語の授業であまり扱われていないのと状況は同じなのかもしれません。

最後に質問です。川嶋先生は五文型の配列に代案を提示しておられましたが、たとえば、他動詞putを使った例文(She put an envelope on the table.)は、どの文型に分類されますでしょうか。

以上、当方の聞き間違いや誤解などがあるかもしれませんが、その場合はどうぞご海容ください。(拝田清)

## &lt;発表を終えて&gt;

下 絵津子 (近畿大学)

英語、そしてそれ以外の言語の教育についても関心があり、現在、近代日本における外国語教育政策について研究を進めております。その研究の一端を本学会例会にて発表する機会をいただき、誠にありがとうございました。本例会では、1880年代から1910年代にかけて、第一高等学校（第一高等中学校）の入学試業における外国語科目—英語・ドイツ語・フランス語—の扱いの変遷を明らかにしました。発表後の質疑応答では、今後の研究を進めるうえで大変参考になる貴重なコメントをいただきました。一つには、ドイツ学振興と明治期の政治的背景との関連性がありました。明治十四年の政変とドイツ学振興については井上久雄氏（1969）が東京大学の外国語教育改革などを考察しています。外国語教育政策の決定過程を検証するにあたっては、そのような制度や規則の変遷に加えて、その変遷に影響を与えた人物や組織の持つ思想や教育理念が重要な要因の一つであり、今後さらに深く追及していきたい課題です。また、英語以外の外国語については私塾が担った役割が大きかったのではという指摘もいただきました。学校制度が発展していく時期に、それが与えた社会的な影響と政策決定に関わる個人が与えた影響を歴史的な史料をもとに解明していく必要性和その面白さを改めて感じさせられる機会となりました。



## &lt;発表を終えて&gt;

川嶋 正士 (日本大学)

まず、発表に際して貴重な機会を与えていただいた学会と有益な質問やコメントをいただいた皆様に心より感謝致します。科学文法の **panoramic view** を目指した『英文法汎論』の中心が「5文型の祖型」となるものであることに興味をそそられたのは、2013年でした。2014年に発表した論文では英文法が規範文法と科学文法とで並列的に扱われていた時代に於いて、科学文法的側面を備えた規範文法書である Onions (1904) を細江が科学文法書としてとらえたのではないかと論じましたが、その後の研究が進むにつれ、細江は晩年まで「5文型」という機能的述部分類を支持していたことが分かりました。「5文型」誕生前後の日本の英文法を研究するうちに細江の文法観を詳しく調べる必要性を感じました。両方の研究を進めるための資料として『英語青年』という英語研究の一大アーカイブに着目しました。以来、創刊号から第100巻までつぶさに目を通す毎日でした。この間の椿事は私のスマートフォンが、一時期指紋認証を受け付けなかったことです。ページをめくる毎日で、指紋が薄れたようでした。それにしても巨大な情報量で、消化不良のまま発表した気がしてなりません。論文化する際に、今回の発表を更に昇華させたものにできることを願っています。



## >> 事務局より

### >> 事務局の「夏休み」について

夏季休暇および職務専念免除を申請し、9月4日(火)までは学会事務局となっている研究室を不在にしております。まことに勝手ながら、この間、事務局の業務は電子メールで対応できるものに限らせていただきたく存じております。郵便・電話・ファクシミリ等をお寄せくださった方へのお返事は9月5日(水)以降となりますので、どうぞご了承ください。

### >> 年会費の納入について

全国大会にお越しになれなかったみなさまに会費納入をお願いする文書(「紀要の送付と年会費の納入について」)をお送りしましたところ、さっそく多くの方にご協力いただきました。ここに厚くお礼申し上げます。なお、所属機関等を宛名とする領収証がお入り用の方は事務局にご連絡ください。

なお、会費に未納分があるみなさまには「会員継続のご案内」をお送りしております。よろしくご確認のほどをお願い申し上げます。(文責:事務局)

## >> 『日本英語教育史研究』第34号投稿論文の募集(再掲)

『日本英語教育史研究』第34号投稿論文募集中(締め切りは10月31日)。詳しくは学会ウェブサイト([www.hiset.jp](http://www.hiset.jp))をご覧ください。

## >> 英語教育史フォルダ

- ◆ 江利川春雄著『日本の外国語教育政策史』ひつじ書房、本体8200円、496ページ。  
古代から2017年度までの日本の外国語教育政策を、実践と関連づけながら通史的に考察。外国語教育政策史年表と主要な政策文書も収録。

## >> 新入会員

- ◆ 藤吉 大介(ふじよし だいすけ) 東京都 東京実業高等学校

## >> この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第269回研究例会 2018年9月15日(土) 広島で開催予定
- ◆ 第270回研究例会 2018年11月17日(土) 京都で開催予定
- ◆ 第271回研究例会 2019年1月12日(土) 東京で開催予定
- ◆ 第272回研究例会 2019年3月16日(土) 京都で開催予定

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要(100~200字程度)、(4) 使用予定機器、以上の4点を明記の上、発表希望月の3ヶ月前の10日(1月発表希望であれば10月10日)までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: [reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp)



## 日本英語教育史学会 第 269 回 研究例会

日 時： 2018 年 9 月 15 日 (土) 14:00～17:00  
場 所： サテライトキャンパスひろしま (広島県民文化センター) 5 階 505 中講義室  
(広島市中区大手町 1-5-3)

### 研究発表①

#### 戦後台湾の英語教科書における題材内容研究——「文学」の特徴をとらえて

平井 清子 (北里大学)

【概要】本研究は、戦後台湾で改定発布された『課程標準』及び『課程綱要』(1948 年～2008 年)準拠版高等学校英語教科書で扱われている題材内容の中で重視されている「文学」に焦点を置き、その特徴と作品の選択にかかわる要因を社会文化的、歴史的背景に考慮して明らかにすることを試みる。中国、日本、アメリカという諸外国からの影響も考慮に入れ、教科書分析の他、戦後台湾の英語教育に携わり、教科書編纂や『課程綱要』作成にかかわった教授陣、現役の高等学校英語教員の方々からの聞き取り調査から考察する。

### 研究発表②

#### 「広島発「ラジオ英語講座」の歴史(2): 他放送局との比較を中心に」

馬本 勉 (県立広島大学) ・河村 和也 (県立広島大学)

【概要】発表者はこれまでに、1928 年に広島放送局から発信された「初等英語講座」(櫻井役)のテキスト第二・第三を素材に、内容、文法、難易度について分析を行い、中学校用検定教科書とは異なる教材としての一端を明らかにした。今回は他の放送局から発信されたテキストとの比較を行い、広島発のラジオ講座が全国的な流れの中で持ち得た意義を追究したい。

参加費：無料

問合せ：日本英語教育史学会例会担当 ([reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp))

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

### 【会場案内】

(県立広島大学のウェブサイト「アクセスマップ」

(<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/satellite/accessmap.html>) より)



【交通案内】

◆JR 広島駅から

路面電車で約 20 分, バスで 15 分, 車で 15 分

◇路面電車 (広島電鉄) の場合

広島港行 「本通り」下車, 徒歩約 5 分

西広島行, 江波行, 宮島行 「紙屋町西」下車, 徒歩約 3 分

◆広島バスセンターから

徒歩 3 分

◆広島空港から

リムジンバス (広島バスセンター行き) 約 60 分

**EDITOR'S BOX** 先月の中国・四国地方の集中豪雨をはじめ, 今夏は今のところ, 猛暑と集中豪雨, またそれらによる被害の大きさばかりが印象に残っています。中学生の頃, 担任の先生から, 「温暖化が進むと日本もだんだん熱帯化する」と言われた時に漠然とした不安を感じましたが, そこから 30 年近く経ち, そのことがいよいよ現実になってきているように思えてしまいます。まだしばらく夏の暑さは続きますが, これ以上被害が起きないことをただただ願うばかりです。